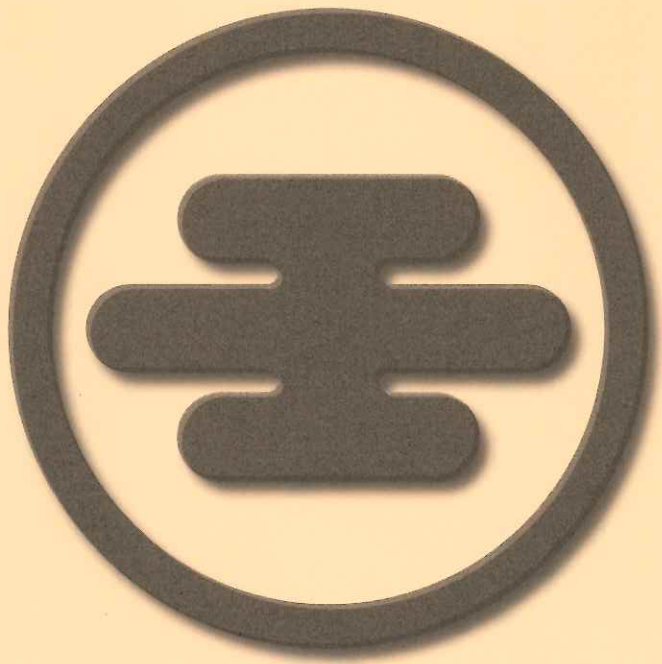


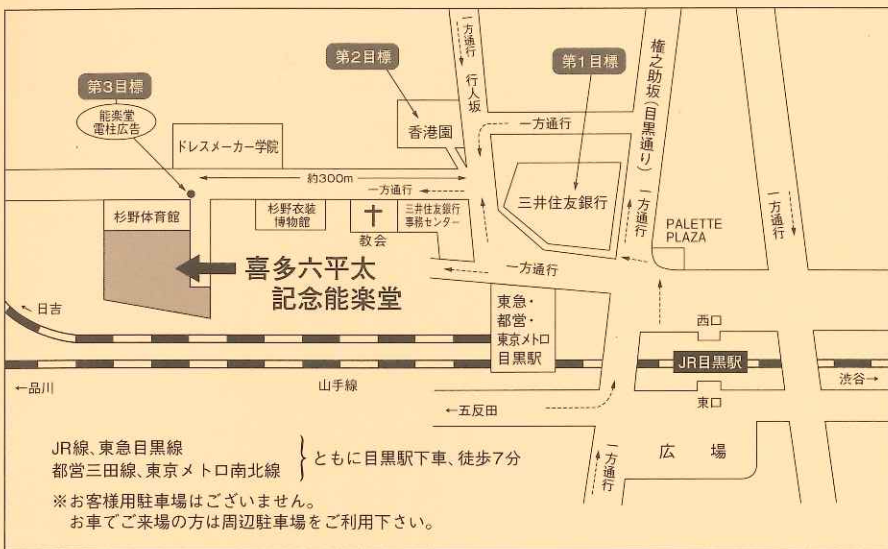
平成二十六年  
六月  
自主公演能

とき 平成二十六年六月二十二日(日)正午始  
 〈整理券配布・十時三十分、  
 見所入場・十一時、解説・十一時十五分〉  
 ところ 十四世喜多六平太記念能楽堂



喜多流職分会

【会場案内図】



主催 喜多流職分会

後援 公益財団法人 十四世六平太記念財団

〒141-0021 東京都品川区上大崎四-六-九

十四世喜多六平太記念能楽堂

電話 (03)3491-1813  
 ファックス (03)3491-1899

# 《チケットのご案内》

六月チケット発売開始日

平成二十六年五月二十五日(日) 午前十時より

## 年間優待券

- 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円
- 五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

## 前売券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円
- 学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

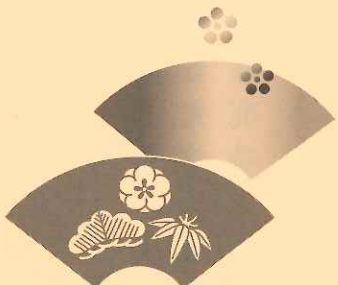
## 当日券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円

## 《お取扱い》

窓口とお電話にて承っております。

(FAX及びメールでのお申し込みは  
お受けしていません。)



十四世喜多六平太記念能楽堂事務局

《電話》〇三―三四九一―八八二三

(午前十時～午後六時)

平成二十六年

## 八月自主公演能予告

平成二十六年八月二十四日(日) 正午始  
十四世喜多六平太記念能楽堂

「半 蔀」 大島輝久

「阿 漕」 友枝雄人

八月チケット発売開始日

平成二十六年六月二十二日(日)

午前十時より

### 【ご注意】

\*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従っていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。

\*2階ラウンジ以外のご飲食は固くお断り致します。

\*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。

\*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。

\*座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。

\*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。

\*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。

\*やむを得ない都合により出演者が変更になる場合がございます。

\*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。

\*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。

\*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます



# 六月自主公演番組

●平成二十六年六月二十二日(日) 正午始  
●整理券配布・十時三十分、見所入場・十二時  
解説・十一時十五分

能

後シテ・巴の靈  
前シテ・里女

高林 呻二

ワキツレ・從僧 矢野 昌平

ワキ・旅僧 村瀬 提

ワキツレ・從僧 村瀬 慧

アイ・粟津の里人 善竹富太郎

大鼓 原岡 一之  
小鼓 古賀 裕己

笛 藤田朝太郎

## 巴

後見

高林白牛口二  
香川 靖嗣

地謡

佐藤 陽 笠井 陸  
塩津圭介 大村 定  
粟谷充雄 粟谷能夫  
佐藤寛泰 金子敬一郎

狂言

## 鎌腹

シテ・太郎 善竹十郎

アド・女房 善竹富太郎  
アド・仲裁人 野島伸仁

休憩 二十分

能

シテ・杜若の精  
里女

内田成信

## 杜若

ワキ・旅僧 福王 和幸

大鼓 佃 良勝 太鼓 梶谷英樹  
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 栗林祐輔

後見

内田安信  
金子匡一

地謡

佐藤 陽 佐藤章雄  
佐々木多門 粟谷明生  
粟谷浩之 出雲康雅  
大島輝久 狩野了一

休憩 十分

蟬丸

仕舞

粟谷幸雄

地謡

佐々木多門  
粟谷充雄  
金子敬一郎  
粟谷浩之

能

後シテ・閻魔王  
前シテ・鶉使の霊

友枝真也

鶉飼

ワキ・旅僧 高井松男

ワキツレ・従僧 殿田謙吉

アイ・石和の里人 善竹大二郎

大鼓 大倉崇太郎  
小鼓 幸 信吾

太鼓 林 雄一郎  
笛 小野寺竜一

後見 塩津哲生  
大島政允

地謡

渡辺康喜 谷 大作  
友枝雄人 中村邦生  
松井 彬 友枝昭世  
佐藤寛泰 長島 茂

附祝言

(終了予定五時頃)

《巴(ともえ)》

信濃の国、木曾の僧が、粟津が原で休んでいると社の前で泣いている女がいた。声をかけると、ここは木曾義仲を祭った社で、同郷であれば霊を弔うように勧めて消え去る。(中人)そして僧が弔っていると甲冑姿の女武者が現れて、義仲に仕えていた巴御前の霊であると明かし、粟津が原の合戦について語る。特に義仲の最期において、巴御前が義仲とともに自害を決意するが、後を追うことは許されず形見を木曾へ届けるように託されたことを語り、なお弔いを願って消え去るのだった。

《鎌腹(かまばら)》

日頃から遊んでばかりで山に薪を取りに行こうとしない夫の太郎に、妻は激怒し鎌を結びつけた棒で追いたるところだった。そこに仲裁人が入り、太郎は鎌と棒を持ち山へ行くことになる。道すがら、妻に殺されるくらいなら自殺をしてやろうと試みるが臆病なので死にきれない。そ

こに、太郎が自殺をしようとしていると噂を聞いた妻がやってきて、自殺を思い止らせようとするので、太郎はそれならば代わりに自殺をしてくれと言うので、妻は再び怒って太郎を追い立てるのだった。

《杜若(かきつばた)》

都方の僧は三河国八橋へやってきた。僧が沢一面に咲く杜若に見惚れていると、里の女が現れ「伊勢物語」にある八橋の杜若の故事を語る。女は「からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ」の古歌を詠じ、在原業平が詠んだ歌だと教え、僧を自分の庵室へ案内する。(物着)やがて女は色鮮やかな装束に冠を着して現れる。装束は業平と契った高子の后のもの、冠は業平が宮中で五節の舞を舞ったときの物だと言い、自分は杜若の精だと告げる。杜若の精は『伊勢物語』の恋物語を舞いに舞い、夜が白むとともに姿を消した。

《鶉飼(うかい)》

安房の清澄の僧が、甲斐の国石和川の畔に着き、旅の疲れを休める一夜の仮寝の宿を乞うが里人は御法度だからと寝て拒み、川岸にあるお堂に泊まることをすすめる。夜中にお堂に老人が入ってきたので何者かと僧が尋ねると、自分は鶉使だという。僧は老人に殺生の業を辞めて他の職につくように言うが、老人は生計をたてるためなので無理だという。従僧の一人が、二、三年前に同じように鶉使に宿を借りたことを思い出した師の僧に話すと、それを聞いた老人はその鶉使は殺生禁断の場所で漁をして罰を受け川へ沈められたと語り、それは自分のことだと話す。(中人)訪れてきた里人からもその鶉使の話聞いて旅僧は川瀬の石一つ一つに、法華経の経の文字を書き波間に沈めて弔いをする。すると閻魔王が現れ、その石に書かれた法華経の功德で老人は成仏したと告げ、法華経を賛美するのであった。